

ヴァイスゲルバーの言語理論

三 城 満 禮

戦後ドイツ文法学は新しい成果を収めつつ著しい発展をとげているが、その背景にあっていわばその理論的支柱としての役割をはたしていると思われるのがヴァイスゲルバーの言語理論である。他の諸学説よりの影響ということをとくに考慮に入れながら、この理論を一つの体系としてとらえようというのが、この小論の目的である。他の西欧諸国の言語学が多かれ少なかれ構造言語学の流れをくんでいるのに対して、ドイツにあっては、このヴァイスゲルバーを中心にした学派は独自の道を歩もうとしている。そのような意味での特異性をも明らかにしていきたい。

十八世紀後半から十九世紀前半にかけて、ドイツでは二人のすぐれた思想家、ヘルダーとW・v・フンボルト

が独自の発想をもった言語思想を発表した。とくにフンボルトの思想は、後になって擡頭してくる新しい言語理論・言語観の基本的な考え方をいくつか、非体系的・萌芽的な形で含んでいる。ソシュールとその後の言語学との間にも同様のことがみとめられるが、そういう意味で、この二人は、言語学説史上、きわめて偉大な予言者的な、そして現代の言語観・言語理論にとって、非常に淵源的な存在である。といってフンボルトの場合、その後の現代にいたるまでの発展が、連続的乃至は直線的であったというのではなく、十九世紀の言語研究は周知の通り実証主義の全盛時代を迎えるのであって、そのためヘルダー、フンボルトと続くいわゆるローマン派的言語思想は、むしろその影にかくれてしまい、傍系となっ

てしまふどころか断絶したとさえいえるのである。音韻の規則的变化を主たる対象とする印欧語比較文法・歴史文法が、それにとって代って、十九世紀において、その龐大な成果を収めていく。これら実証主義的言語学者は、いわば印欧諸語族という祖先が残してくれた莫大な言語遺産の管理人のようなもので、その遺産を整理・記録した遺産目録——それがとりもなおさず、彼らの成果であった。構造的・世界観的に全く未知な言語を研究対象にするのでなくその構造的相似性が予想されるような言語において、その予想の正しかったことを実証するところが彼らの仕事であったが、十九世紀から全世紀初頭にかけてこの実証主義的言語研究もいわば一種の飽和状態に達してきて、彼らの残してくれた遺産目録がいまでも貴重な財産たることを失わないことはいうまでもないが、他面、新しい方法的自覚のもとに、言語研究のいろいろな新機運が生まれてきたことも事実である。

このような状態の中にあつて、ソシュールの理論を出发点として、ある言語を一時代で切つて、その構断面を音声形態の現象面から一つの完結した記号体系としてとらえようという構造言語学が次第に発展していく。それ

と並んで、このような新しい言語理論の影響を受け、その分析方法・成果をいろいろ内部に吸収しながら、実証主義的研究によって影に追いやられていたフンボルトの言語思想を新たな近代的な装いのもとに体系的に整備されたものとして復活させようとする試みが生まれた。この大がかりな試みが、すなわちヴァイスゲルバーの言語理論の意義・本質であるといつていい。したがって、今後その理論の内容を吟味していくと明らかにするが、このヴァイスゲルバーの理論の中でほんとうに新しいものはなく、ヴァイスゲルバーの発見といえるものは決して多くはなく、その理論はいろいろな学説の複合体、一つのすぐれた複合体というふうに評価できるように思われる。

あるものの本質をつかまえて定義するにあたって、その用途をいろいろ列挙して定義するやり方は必ずしも間違ではないにしてもその本質を十分にとらえるものではないという考え方から、ヴァイスゲルバーは、言語も、伝達・意志疎通・表現などの手段として把握することは十全なる方法ではないとする。(もっとも、彼自身も言語を結局は一つの「働き・機能」としてつかまえてようとしているの

ではあるが、構造言語学に属する学派ではこまかいところでは多少の違いはあるにしても、言語を大体次のように定義している。

「人間が相互に思想を伝達するのに用いる恣意的な音声記号の体系」⁽¹⁾ ヴァイスゲルバーは、このような用途・手段からする定義にあきたらず、これに対して言語を一つの精神的な力(geistige Kraft)、「言語力」(Sprachkraft)としてとらえる。これもさかのぼっていけば、フンボルトにつきあたるのであって、フンボルトはしばしば「精神力」(Geisteskraft)⁽²⁾と、表現を用いている。

外的世界というのは、人間にとっては単に外から与えられたものにとどまるわけにはいかずに、人間自身がそのそなわっている諸力を総動員して人間に適したものに變形され、獲得されていく何物かである。そのときに動員される力には、肉体的なものとしては労働力、感覺的なものとしては五感があるが、精神的なものとしては(感覺的な要素ももちろん含まれてはいるが)芸術・宗教などを生み出す力と並んでそのもっとも根本的なものとして、言語がある。ちょうど労働力に対応するような、外界を支配し、生乃至は人間が生活をしていく世界を形成

する力のもっとも基本的なものが言語である。(この点については、後の機能論的段階のところでもまたふれる機会があるが、ヴァイスゲルバーも言語を結局は一つの機能ひいては手段としてとらえているのであるから、彼の定義法も他のそれと本質的にちがうというとはいえない。)このように言語を一つの力として把握する考え方も、フンボルトの言語観と密接なつながりをもっている。すなわちあのあまりにも有名になってしまった「言語は死んだ所産(Erzeugnis)ではなく、むしろ何かを生み出す力(Erzeugung)とみなさなければならぬ」⁽³⁾、「言語そのものは、作られたもの(Werk(Ergon))ではなく、働き(Thätigkeit(Energie))である」⁽⁴⁾という思想に基いているのである。しかしここで注意すべきことは、言語をエネルギー「力・働き」としてとらえるということは、必ずしも言語の本質を、ソシュールのいう意味でのパロール(Parole)におくものとは限らないということである。つまり、エルゴン・エネルギーという対立は、ラング(Language)―パロールの対立にすぐに対応するものではないのである。ヴァイスゲルバーの対象としているのは、むしろ個々人の具体的な言語活動(パロール)を可能ならしめる潜在的な社会的

準拠体系であるところのラングである。ただそのラングを問題とするときあまりにも静止した体系、一定の規則の集合体である形成物という点にばかりとらわれすぎないで、その背後にある言語の力動的な機能・働きに重点をおかなければいけないということが、ヴァイスゲルバーの第一の要請である。(なおついでに言えば、ソシュールに発し、その後の言語学の共有財産となったこのラングとバロールという区別は、実は、すでにフンボルトにおいて——きわめて萌芽的な形で——みられる。「そのときどきに話されたものと、その話をされたものが生み出したものの集まりである言語とは別のものである」)「言語は、すでに形成された要素とならんで、精神の作業——その作業の進むべき道と形式は、言語が指示してくれるのだが——を続けていくための方法をもとくに含んでいる。」⁽⁶⁾「ここで言語と⁽⁶⁾いっているのが、すなわちラングである。」

言語をこのようなものとしてみながら、ヴァイスゲルバーは、人間の生活が必然的に言語に支配され、条件づけられているという明白な事実を一つの公理として、理論の最初にすえおいて、それを「言語の人類性の法則」(Menschengesetz der Sprache)とよんでいる。⁽⁶⁾そしてこ

れは一つの「歴史的な自然法則」だといっている。さらにこの法則は次のような三つの法則から成り立っている。第一には、人間が人間であるかぎり、すなわち人類としての存在において、その存在そのもの、その存在の全領域にわたって、言語によって条件づけられているという意味での「言語によって条件づけられた存在の法則」(Das Gesetz des sprachbedingten Daseins)「この問題を対象とするのが言語哲学である」と、第二には、各人は、生まれてすぐから一定の国語を習得せざるをえず、その後一生を通じてその母国語の支配を受けているという意味での「母国語の法則」(Das Gesetz der Muttersprache)「この問題を研究対象とするのが言語心理学である」と、第三には、言語というものが、全世界共通の世界語といったようなものでなく、必然的にいくつかの国語に、したがっていくつかの言語共同体に分割しつくされてしまうという意味での「言語共同体の法則」(Das Gesetz der Sprachgemeinschaft)「これにより、人間は皆一つの母国語をもち、どれか一つの言語共同体に属せしめられる」の三つである。ヴァイスゲルバーの言語理論において、もっとも重要な位置をしめているのは、この

第三の法則で、これを彼は言語社会学の領域に入るものとしてゐる。したがって、言語一般ではなく、母国語↓言語共同体という相関関係のもととらえられた、ある特定の言語の動的な構造の把握ということが、ヴァイスゲルバーにとっての言語研究の真の目的である。このような意味での言語は、一つの社会的な客観的形成物として、法・宗教などと並ぶわけだが、他面前述したように「力・働き」という面がとくに重要な要素をなしているので、その存在状態についていえば、言語や法等は、物的な実在でもなく、また単に頭のなかでのみ存在する抽象的・観念的なものでもなく、第三の「有効性」(Wirksamkeit)という形で現実の存在となる。

ある特定の言語共同体になされた母国語の研究が完全な形で行なわれるためには、ヴァイスゲルバーは、次の四つの段階をふまなければならないと考える。

- 一、形態論的考察 (gestaltbezogene Betrachtung)
- 二、内容論的考察 (inhaltbezogene Betrachtung)
- 三、機能論的考察 (leistungbezogene Betrachtung)
- 四、影響論的考察 (wirkungbezogene Betrachtung)

この内第一と第二の方法は静態的 (statisch) な考察法で、この二つがあわさって「文法」が成り立つ。第三と第四の方法は、動態的 (energetisch) とよばれ、前の二つの段階といっしょになって、真の意味での「言語学」を構成する。この四つの段階は、「力」としての言語に含まれる次元の異なる四つの基本的層にそれぞれ対応するものである。したがってこのどれか一つの段階を欠いても、言語研究は完全なものとはいえず、そういう意味でも、言語研究は完全なものだが、ヴァイスゲルバーの言語観、論述の運び・調子などからいって、やはりなんといても第三の機能論的考察がもっとも重要視されているように思われる。(しかし内容的にもっとも充実しているのは、後でみるようにむしろ第二の内容論的考察である。) この四つの段階は次元の異なるものとしてかなりうるさく区別されていて、実質的には同じ事柄に関係しているときでも、用語はそれぞれの段階に応じていろいろ別のものが用いられている。言語の研究はしたがって、ヴァイスゲルバーにおいては、第一の形態論的考察を土台にして次々と段階をふんで、第三の機能論的段階論でいわば一種の頂点に達して、第四の段階では、言語外の領域に

視野をひろげて仕上げをするという形をとることになる。ある低い段階でえられる研究対象の像は、決してまぢがったものではないが、より高い段階に比べると文字通り次元が一つ足りないのだから、それは一つの「投影」(Projektion)にすぎない。第三の段階で立体であるものも、第二では平面に、第一では直線や点となってしまう。また本質的にある段階に属する事柄を、別のたいていはより低い次元から——たとえば、意味内容を内容の次元からでなく形態の次元からというふう——みることを、ヴァイスゲルバーは Anschick「望視」^{ぼんし}とよんで、その必要性は認めながらも、方法としては対象の本質に対して十全ではないとしている。

体系としてみると、ヴァイスゲルバーは、従来の「文法」(Grammatik)をその一部として内部に包含してしまふようなより包的括な「言語学」(Sprachwissenschaft)の建設をめざしている。

ヴァイスゲルバーの重要な著作は、それぞれほぼこの四つの段階に対応している。「ドイツ語の力について」(Von den Kräften der deutschen Sprache)とこう標題でまとめられている四つの著作のうち第一巻「内容論的

文法概要⁽⁸⁾」は第二の段階に、第二巻の「世界の言語的形成⁽⁹⁾」は第三の段階に、そして第三巻「われわれの文化を形成する母国語⁽¹⁰⁾」と第四巻「ドイツ語の歴史的力⁽¹¹⁾」は第四の段階に相当している。さらにこの四段階を通論した「言語研究の四段階について」⁽¹²⁾と、ヴァイスゲルバー言語理論を体系的にまとめたものとして一番新しく出た「言語の人類性の法則⁽⁶⁾」がある。その他にも、論文がかなりたくさんあるが、それらは、全部積み重なって、集約された形でこれらの著作の中にまとめられている。他面、ヴァイスゲルバーの書いたものがこのように重層的にできあがっていったせいか、内容上の重複・反復がかなりうるさく目につく。(上記の著作のうち(8)と(9)と(12)は特にはなはだしい。)

第四の影響論的考察は、むしろ応用論的な領域に入ってきて、本来の言語理論からいうと多少わき道にそれる感じがするし、また、理論的には十分に展開されていないように思われるので、この小論では扱わないで、他の三つの段階がどのような理論的内容をもっているかみていきたい。

形態論的考察。第一の段階をなすこの形態論的考察についていえば、ヴァイスゲルバーは、従来の文法学者、言語学者のあげた成果を一つの資料・財産として受け入れるという態度に終始して、自分ではあまり積極的な寄与はしていない。言語の一番表面に出る現象が音声・形態であるかぎりこの段階が必要不可避であることをヴァイスゲルバーも認めているが、それだけでは言語の本質をとらえるのに不十分であると考える。構造言語学派はいわばこの段階にとどまって、共時論的記述言語学をいよいよ精密なものとしていこうというのであるから、この点でヴァイスゲルバーは構造派と決定的にたもとをわかつことになる。

形態論的段階において語の「意味」(Bedeutung)と称されているものは、実は形態という次元からみた語の「内容」(Inhalt)であり、さきほど紹介した術語を用いれば、「内容」の形態論的望視が「意味」ということになる。このような「意味」やそれにもとづくいわゆる「意味論」が語の内容の把握という点でなぜ十全でないかという点、それは、ヴァイスゲルバーにいわせると、この次の段階ででてくる、意味内容決定の方式である「語

場」の観点にたたず、また「言語の中間世界」ということを知らないため、言語の次元と事物の次元とをきわめて素朴に混同してしまうからである。(従来の辞書に対するヴァイスゲルバーの批判も、結局は同じような考え方にもとづいている。この批判はしかし実際性を無視している点、それからかなりドグマティックな点においがするという点で必ずしも説得力があるとは思えない。)

文法は前述したように、この形態論的考察と次の内容論的考察の二つから成り立っているのだが、ヴァイスゲルバーは、結局文法を、一母言語の現状調査、たなおろし(Bestandsaufnahme)、さまざまの言語的な事実の意識化であるとしている。したがって形態論的段階では、一母国語のなかで有効であるような音声記号の意識化ということが第一の課題となる。

内容論的考察。ヴァイスゲルバーの理論体系のなかではもっとも充実している部分であるが、その出発点となっているのが記号論である。そのさい、ヴァイスゲルバーは、ヘルダーが一七七〇年にあらわした「言語起源論」でのべている思想から出発して、さらにカシーラー

の代表作「象徴形式の哲学」を援用しながらも、結局、ソシュールの言語記号論をそのまま踏襲しているといっている。つまり言葉という記号は、感覚的にとらえられている音声形態とそれになわれ、それと不可分に結びついている意味内容——すなわちソシュールのいう *signifiant* と *signifié* からなりたっている。さらに人間が記号をもつ必然性については、ヘルダーの次のような考え方によっている。ヘルダーは人間を動物から区別するもつとも著しい特徴の一つとして *Besonnenheit* 「自覚」ということをあげているが、これによって、人間は無限に連続し、絶えず生起する膨大な事象の流れの中に埋没した状態から抜け出して、客観世界を一定の距離において見渡すことができる。無意識・盲目的な動物は反射という系列に属する行動をするが、自覚的存在である人間はこの反射系列に代るものを必要とする。それがすなわち記号の乃至は象徴的認識である。そしてこのような認識では、人間が精神的な内容をつかみ固定するのにどうして一定の感覚的な徴表を必要とするのであってその精神的なものとの感覚的なものとの必然的な結合ということに記号の本質がある。どちらの要素をかけても記号は成立

しない。ただ記号には二つの種類が区別され、一つは自然的記号、他は人為的記号とよばれる。この区別はカシーラー⁽¹³⁾によっていると思われるが、前者は、自己の体験のなかの任意の一部をとり出して——たいいていはそれは対象に自然にそなわる一つの感覚的特徴である——それに記号としての役割をお寄せたものであるのに対して、(ヘルダーのあげている例では、小羊の鳴き声がその小羊に対する自然的記号になっている)⁽¹⁴⁾ 後者は、体験の中に人為的にそれだけの目的のためにもちこまれた感覚的な要素のことをいう。人為的記号はしたがって対象との間に自然のすなわち必然の結びつきはなく、このことが後の言語記号とその意味内容との結びつきということで問題になってくる。自然的記号は、特定の対象・体験にしばらくして、普遍性と、認識の対象を構成するという意味での創造性を欠くので、象徴的認識の手段としては不十分である。どうしてもある段階になると人為的記号が登場せざるを得ないのである。言語はこのような人為的記号の中で、人間にとってもっと基本的・代表的なものである。しかしながら、人間においては、記号が存在するから、それにふさわしい認識方法、精神活動が成立すると

いうのではなくて、むしろ逆に意識的な精神活動をするからこそ、その必要にせまられて記号が生まれるのである。記号はいわばこのような目にみえない人間特有の精神の働きの具体的な痕跡、具体的な形に晶出したものである。

言語がこのような意味で、音声という感覚的に把握できる面と、それになわかれてそれと不可分に存在する意味内容の世界からなる人為的記号であるとすれば、ヴァイスゲルバーにとって言語研究の最大の目標は、この意味内容の世界——これはまた当然前述の「言語共同体の法則」の通りに、それぞれの国語によって特異性をもつのだが——の内的構造の動態的な、——したがって次の機能論的段階で完全におこなわれる——説明ということにある。さきにもちよつとふれたように現代の構造言語学派とヴァイスゲルバーの言語理論とのいちばん大きなちがいはここにある。構造言語学派は、共時論的な立場にたつて、一つの完結した記号体系としての言語にもつばらその現象面から迫って、「意味」の世界はこれを想定はしながらも、それを「彼方」にある科学的に把握しがたいものとして考察の対象から排除してしま

う。ヴァイスゲルバーはそのかえりみられない領域をむしろ、中心におこうとするのである。他の学派が音声・音韻・形態という現象面から迫って、あわよくば意味の世界を透かし見ようというのにとどまっているのに対して、ヴァイスゲルバーは、視点を一八〇度転回して、意味の世界のただ中においていき、いわば背後から現象界のほうをものぞこうというのである。構造派においても、意味の面が全く無視されたり、分析が不必要だと考えられているわけではないということはいうまでもないことであつて——それは、*expression* に対して *content* または *meaning* などとよばれている——むしろ、敬遠されてきたのである。そうなたつた理由はいろいろ考えられるが、言語の音声・意味という二重構造が認識されたのが比較的最近で、それまでははっきりとつかまえられない音声・形態の面に研究が集中していたこと、感覚的につかみえない意味の領域を分析する方法論が確立されなかったこと、アメリカなどでは、構造言語学が、印欧語と発想を全く異にするインディアンを対象としたことなどが主な理由としてあげられる。

この内容論的段階で静態にとらえられた各国語にお

いて固有な構造をもつ言語の意味内容の世界を、ヴァイスゲルバーは「Zwischenwelt」「母国語的中間世界⁽¹⁶⁾」と名づけている。(これは、その源にまでさかのぼっていけば、フンボルトのいう Weltansicht der Sprache「言葉の世界像」につきあたる。)ここでいう中間世界の「中間」というのはどういう意味であろうか。一つには、人間の精神、ヘルダーのいう Besonnenheit と客観的な外的世界とが対決してこの二つの間に成立するという意味で「中間」である。この世界は、外界からも、人間の側からも完全に導き出されえない——逆にいえば、どちらにも還元されえない——「中間」の世界である。そしてその成立に参与する人間は、個人としての人間、一般人類の一員としての人間でなく、特定の言語共同体の成員としての人間であるという意味で、この世界は社会的な客観的形成物である。またもう一つには、音声・形態から、直接外の事物の世界に通じる道はなく、この両者の中間にある意味内容の世界を経なければならぬという意味でこの世界は「中間」なのである。この中間世界の存在によって、事物の世界と言語の世界とは切り離される。いわば無限連続体である外的世界からやってきた光

は、中間にあるプリズムによって、濾過・屈折・分割されて、音声記号という単位にまとめられるのだが、このプリズムこそここでいう「母国語的中間世界」にほかならない。中間世界の内部構造をみれば、ある国語が現実をどのように把握・解釈し変形しているかがわかる。言語記号は、その意味面に注目していえば、精神にとっての対象を構成するという機能をもっているが、そういう対象を構成する「場」がこの中間世界であるともいえる。(したがって器質的なことを度外視しいうと、失語症と

いうのは、この中間世界を形成することができなくなった病気のことをいうのであろう。)音声記号はその母国語的中間世界に媒介されてはじめて「言語」となりうるし、逆にこの精神的世界は、ある特定の言語の記号の世界の中に根をおろして、確固とした持続性のある感覚的な形姿をとることによってはじめて存在しうる。

この中間世界という考え方でとくに注意すべきことは、さきほどもちょっとふれたように、その形成にあたって参与しているのが、特定の共同体の一員としての人間であること——つまり、この世界がすぐれて社会的なものであるということである。言語はしたがってそれ自

体は、没個性的な社会形成物、社会内を一般的に流通する共有財産であって、その中間世界はきわめて日常的な意味で、人間と人間とが出会い、交流する場でもある。いやその条件ですらあるといえる。ここでいう人間間の出会いや交流は、もちろんその当の人間のきわめて表面的な・公約的な一部のみかかわるような種類のものであって、そこからはみ出した部分とはということになるとそれはもうふつうの意味での言語の機能の次元をはなれて、たとえば文学の問題となってくる。

次にその中間世界、意味内容の世界はどんな内的構造をもっているのだろうか。この世界が記号の一部をなしているということはすでにのべたが、そのほかにもう一つ、この世界を支え、支配している重要な法則がある。それは「場の法則」(Gesetz des Feldes)とよばれる。ある意味内容には、どれかわからないが、ともかく一つの音声記号が対応するという意味で語の意味内容は「一般に」必然的に音声記号に結びつけられ、その記号をばなれては存在しえない——このことを、ヴァイズゲルバは「記号の法則」(Gesetz des Zeichens)とよんでいる——が、しかしそれはあくまでも結びつけられているだ

けであって、それに決定されはしない。したがって特定の音声記号をとった場合、両者の間の関係には、いかなる意味での必然性もみとめられない。(ソシュールのいう言語記号の arbitraire ということもこういう意味の「任(恣)意性」であって、「あいまい」ということではないだろう。)つまり音声形態面には、意味内容を決定する権限は本来ない。してみると、なにか別の仕組みで意味内容が決定されていなければならない。この問題は、別の観点からみれば次のような一つの問いの形に書きかえることができる。母国語を使用する言語共同体のメンバーである個人に意識されないような仕方では、語はどのようにしてその確定した意味内容を獲得するのか。その意味内容決定の機構はどうなっているのか。ヴァイズゲルバは、この問題を「内容決定の諸方式」(Formen inhaltlicher Bestimmtheit)という観点から一括して論じている。意味内容決定の方式としては種々のものがあるがその中で言語にとってもっとも本質的なものが、さきにもちよっとふれた「言語場(もう少しせまくいえば語場)による決定」である。言語場というのは、同一範疇に属するほぼ類似した意味をもついくつかの言語記号によって有機的に、

すさまじく構成されて一つの全体をなす言語的中间世界の一断面をいう。この場の中では、各記号は一つの部分として、お互いにすさまじく一つの領域を分割しあうことによってその領域を構成しているわけだから、その全体の中にしめる相対的な位置に応じて、それぞれの記号の意味内容は「相互的な画定」(gegenseitige Abgrenzung)によって決定される。これが「内容決定の諸方式」の中でもっとも重要とされる「言語場による決定」である。「記号の法則」が言語記号のいわば縦のつながりであるとするば、言語場内の相互画定ということは横のつながりをなすものである。ある意味内容は、必ずある一定の音声形態を割り当ててもらうが、それを割り当ててもらうかは言語場内で相互的に決定されるということになる。言語記号の任意性の根源はここにあるといわなければならぬ。そして、「語感」ということも言語学的に掘り下げていくと、やはりこの語場内の相互画定ということにぶつかってくる。

このような観点から、言語の意味内容の世界の構造を具体的に解明した研究としては、ドイツでは、「理解」という意味範疇に属する語彙についての J. Thier⁽¹⁸⁾の先駆的

業績があるが、(ヴァイスゲルバーもしばしば引用している)「相互画定」という思想自体は、すでにソシュールが次のようにきわめて明確な形で打ち出している。「同一言語内では、類似した観念を表わす語は相互に画定し合う」⁽¹⁹⁾またこのような考え方は、言語学においては、周知の通り音韻の領域にはいちはやく適用されて、Trudetzky⁽¹⁹⁾らの音素論となって実を結んだ。

「相互画定」以外の「内容決定の方式」として、ヴァイスゲルバーは次のような方式をあげている。

一、外界の事物による決定。(きわめてまれにしかみられず、その極限は固有名詞である。)

二、音声記号による決定。(これも非常にまれで、たとえば *butten* というような擬声語が、ライオンにもまた牛にも用いられるというふうには、他からの限定なしに、同一の音声記号がいくつかの対象について用いられる場合。)

三、誘導された言葉。(外国の言葉を手本にしてそれにならった借用語や、人為的に規制されたり、定義されたりして意味内容を決められる専門用語など。)

四、特種例。(熟語・成句の類、新語や死滅しつつある語、いくつかの同音異義語に分解される *machen* とか *haben* など

の巨語 (Riesenwort) 造語や既成の語に特種な意味をもたせたりするような「恣意語」(eigenwillige Wörter) など。

五、最後に「語場による決定」とならんで重要な「語階級」(Wortstand) による決定」があげられる。—Stand 階級 (Wortstand) というのは、「身分・階級」という意味の Stand からきているのだが、Wortstand という語は、(20) 这里是形態論的次元で使われる Ableitungstyp 「派生型」へたとえば、heit で導かれる名詞というように同一の前後綴によってつくられる派生語の全体」という術語に、内容的次元でちょうど対応する用語である。同一派生型に属するものは、もちろんいつでも同じ一つの意味範疇のもとに統一することはできないが、派生型の内部では、語はいくつかの同じ意味をもったグループにまとめることができ(21) る。そのグループをヴァイスゲルバーは「語籠」(Wort-nische) とよんでいる。そして、ほぼ似たような意味をもったいくつかの「語籠」の集まりがほかならぬ「語階級」である。したがって形態の同一性という観点から一括されたものが派生型であるとすれば、意味の類似という点から一つにまとめられた派生語が語階級である。語階級の中には形態的にはいろいろなものが含まれている。語

階級と語籠との間の関係は、語場と語との間の関係と同じで、語階級の内部ではやはり場の法則が支配している。(このところではヴァイスゲルバーは、たとえば Ornativa 「備与動詞」という語階級を例としてあげている。その中には en によるもの、be-…-en によるもの、be-…-igen によるもの、-ieren によるものというふうに関にさまざまの語籠が含まれている。)

「語場による決定」と「語階級による決定」は、ある段階で競合する場合もあるが、そのさい前者の方が勝つのがふつうである。従来、もっぱら形態的な観点から——したがって語原的に——同一の幹語から派生したとみなされた語の総体は Wortfamilie 「語家族」とよばれていたが、この用語も、前記のような競合現象があるため不備なものとなってしまうので、ヴァイスゲルバーはそれに代ってある幹語の Fächerung 「扇開」(22) という術語を提唱している。扇開というのは、純粹に内容的見地にたつもので、ある幹語の派生語のうちその幹語から派生したと意識されるもの、意味内容からいってその幹語から派生したと意識されるものの総体が一つの「扇開」を形成する。たとえば, hablich は形態論的な観点から

は *hassen* とともに同一語家族の中に入るが、内容論的な立場からはもはや *hassen* の扇開には入らず、別の「醜い」という形容詞の語場の一員となる。

機能論的考察。

この段階では、前段階と比較して内容上とくに著しい飛躍がみられるというわけではなく、むしろ、内容論的段階において用いられた種々の用語をこの機能論の段階にふさわしいものに変換すること——別のいい方をすれば、内容論的な用語の対応形を見出すことにもっぱら力がそそがれている観がある。

ただ一つの例外をなすのが、言語の最終的な定義で、これがこの段階における考察の唯一の成果だといっている。言語は、ヴァイスゲルバーにとっては、その機能の面から把握されて結局「世界の母国語的語化の過程」*Prozess des muttersprachlichen Wortens der Welt*と定義される。「過程」としてとらえられている点に、ヴァイスゲルバーがたえず唱えてやまない言語の動態的把握ということが実現されている。ここで用いられている *worten* というのは結局はヴァイスゲルバーの一種の造

語 *Wort*、*Knecht* (奴隸) → *knechten* (奴隸にする) と相似に *Wort* からつくられた作為動詞である。そのさい *Sprache* に対する *sprechen* とか *versprachlichen* などというのも考えられるが、結局 *worten* におちついたのは少し意味はちがうにしても中世にすでに *worten* という語が存在していたからである。中世の神秘主義者たちは、大抵現在の *sprechen* の意味でこの語を用いていたようである。すでに本小論の最初のところでのべたように人間は、自分にそなわる肉体的・感覚的・精神的な力を総動員して外的世界を人間化して、そこから「人間の生活している世界」(*menschliche Lebenswelt*) を形成する。このような世界の中で生活している人間の方からみれば、人間はその中で、感覚的・精神的な力によって「定位」(*Orientierung*) をするのである。人間の活動の中でいわばもっとも基本的であるといえるこのような世界形成の活動のさいにおける、言語の寄与を「世界の語化」とよんでいるのである。

このように一方では、人間化された世界があるのと同じ時に、他方の極には永遠に人間化されず、人間の近づき得ない、とらえることのできない世界がある。前者をヴ

ヴァイスゲルバーは「世界」(Welt)とよび後者を Wirklichkeit「現実」とよんでいる。この二つの世界は、概念としてはもちろんさい然と区別されるが、現実には語化やその他の人間化の活動が進行しているわけだから、その境界はたえず動いているといわなければならない。

この人間化された「世界」を経験界とみなし、言語を時空の直観形式やカテゴリーに相当するものと考えれば本小論で紹介したヴァイスゲルバーの言語観がいかにカントの先験論的哲学に類似した構造をもっているかがわかる。そして人間の近づきえない「現実」というのは、人間の感覚を触発はするが認識されえないあの物自体にまさしく対応している。

ある特定の言語における「語化」の個々の具体的な活動・作用のことを、ヴァイスゲルバーは *Zugriff*「捕捉」⁽²⁴⁾とよんでいる。ヴァイスゲルバーの他の、たとえば扇開などという術語と同じくなにか非常に生々しい具象性をもっていて、どういう発想にもとづいているのかなかなかつかみにくい、この *Zugriff* の場合はおそらく静態的な *Begriff*「概念」に対応する動態的な概念として生まれたのではないかと思われる。*Begriff* と並べてみれば

それほどわかりにくい言葉でもない。文字通りに言語がその機能を發揮して外の「現実」界などから *zugreifen*「つかみとってくる」のである。その「捕捉」という言葉は機能論的段階において、内容論的段階における *Inhalt*「内容」と、形態論的段階における *Bedeutung*「意味」にちょうど相当するものであって、さらに影響論的段階に進むと、*Geitung*「妥当性」とよばれるようになる。すでに前の内容論的段階においてみてきたように、語の「内容」が決定されるには種々の方式があったが、その内容の「決定」(*Bestimmtheit*)に、機能論的段階でちょうど対応するのが *Gerichtetheit*「方向」⁽²⁵⁾である。機能論的段階では言語的「捕捉」の「方向」を吟味すること——これはすなわち内容論的な次元に翻訳していえば、言語の「内容」の「決定」方式の吟味ということになる——が一つの大切な仕事になる。もう一つ重要な仕事があるが、それは「語化の舞台」(*Schauplatz des Wortens*)がどれであるかを吟味することである。世界の語化には四つの舞台があるとヴァイスゲルバーは考える。すなわち、(一)人間の言葉の力が前述した「現実」界にじかにぶつつかる場合。(ヴァイスゲルバーは実例をあげ

にくいといっているが、それはそのはずで、「現実」の定義からいってこのような場合はほとんど不可能であるといっている。(二)言語以外の他の感覚的・精神的力によってすでに人間化された現実をさらに語化する場合。「赤い・苦い」というような感覚的性質、「聞く・見る」というような感覚的行為などがここに入る一方、宗教や芸術によってすでに人間化されたものもこの舞台で語化される。(三)言語以外の他の感覚的・精神的力が外界の現実を人間化したものでなく、それらがいわば自発的に生み出したものがさらに語化される場合。(美醜・喜怒哀楽に関する語彙はこの舞台で生まれる。さらに文法的な現象としては品詞や「文設計図」(Satzbau-plan⁽²⁶⁾)や動詞の「態様」(Apekt⁽²⁶⁾)などがここに入る。(四)言語自体がなんら他の素材なしに創造していく場合。(ここでもっとも重要なのは、派生語を造り出すという言語の力である。)語化にみられるこの四つの場合のうち、無から有を造り出すという色彩のこい(一)と(四)のケースを erworden「語成」、すでに造り出されたものを語化するという(二)と(三)の場合を verworben「語転化」とよんでいる。

この機能論的段階では、結局、一つ一つの言語現象について、その「捕捉」の「方向」(つまり意味内容がどの方向で決定されているかということ)および、語化の舞台が上記の四つの場合のどれであるかということに吟味するところが重要な仕事になってくる。この二つがわかれば、それはちょうど座標 Koordinaten のようにその言語現象を決定する。

ヘルダー、フンボルト、カント、カシーラー、ソシュールなどさまざまな流れが合流して独特の複合体を形成しているヴァイスゲルバーの言語理論の骨組みは以上のようなものであるが、それは全体として、非常に要請的・綱領的色彩が強く、実質的な裏づけは今後の具体的な個別研究にまたなければならぬという面がいろいろある。とくに最後にのべた、捕捉の方向と、語化の舞台の吟味などということは、非常に図式的・スコラ的なにおいが強く、はたして言語研究の上でどれほどの意味があるのかうたがわしい。新しい分析用具をいろいろあみ出した功績ということはあるが、それが、まだ十分に働いていないという感じで、結局、言語を力としてとらえ、意味内容の面を重視しなければならないという要請ばかり強くひびいてくるように思われる。ヴァイスゲル

バーの言語観には一面文化人類学的な考え方が濃厚にみられるのだが、今後はその言語理論はおそらくこの方向に発展していくのではないかと予想される。とくに、記号論などは、ヴァイスマゲルバーにおいては、もっぱらカシーラーヤンシェールに依拠しているが、この言語記号論も、今後は、人間の行動を代替する社会的・抽象的体系——これは、社会的・抽象的な富の代替形態である貨幣とよく似ているが——という側面からもっと掘り下げようとするであろう。

- (1) J. P. Hughes: The Science of Language (An Introduction to Linguistics), Random House, N. Y. 1962, 6.
- (2) W. v. Humboldt: Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts, Dümmler, Bonn 1836, XVII ff.
- (3) ditto LV.
- (4) ditto LVII.
- (5) ditto LXXVI—LXXVII.
- (6) L. Weisgerber: Das Menschheitsgesetz der Sprache, Quelle & Meyer, Heidelberg 1964, 15 ff.
- (7) …bezogen という語を和田賢一郎氏は「即…的」と訳しておられ、大変びっぴりとしたいい訳で、これをその

まま踏襲したほうがいいと思うが、一つの試みとして別の訳を出してみた。「和田賢一郎、ドイツ語学研究方法論考——即音韻的研究と即内容的研究——」関西大学独逸文学会『独逸文学』一〇号、一九六四、二三七—二四八頁

- (8) L. Weisgerber: Grundzüge der inhaltbezogenen Grammatik (Von den Kräften der deutschen Sprache I), Schwann, Düsseldorf 1962².
- (9) ———: Die sprachliche Gestaltung der Welt (Von den Kräften der deutschen Sprache II), 1962².
- (10) ———: Muttersprache im Aufbau unserer Kultur (Von den Kräften der deutschen Sprache III), 1957².
- (11) ———: Die geschichtliche Kraft der deutschen Sprache (Von den Kräften der deutschen Sprache IV), 1959¹.
- (12) ———: Die vier Stufen der Erforschung der Sprachen (Sprache und Gemeinschaft, Grundlegung I) Schwann, Düsseldorf 1963¹.
- (13) E. Cassirer: Philosophie der symbolischen Formen I. Teil: Die Sprache, Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1964, 11~42.
- (14) J. G. Herder: Sämtl. Werke, hrsg. v. B. Suphan, 1887~1917, Bd. 5, 34 ff.
- (15) Sprachliche Zwischenwelt のリヤを Weisgerber は多少動態的な視点からではあるがほとんど同じ意味で Weltbild der Sprache 「言語の世界像」ともよんでる。

- Gipper の提議については「Bausteine zur Sprachinhaltsforschung (Sprache und Gemeinschaft, Studien Band I), Schwann, Düsseldorf 1963, 297~366) ノーマンの言語学者 B. L. Whorf の『*Language, Thought, and Reality* (Selected Writings of Benjamin Lee Whorf), The M. I. T. Press 1956, p. 221.』については of the world という用語をどう用いるか。Whorf のこの考え方は『*World and I*, Sapir と由来については『*World and I*, Weisgerber, Sapir, Humboldt の三者の關係を特別に検討する必要がある。』
- (19) 上記 (2) の LXXXIV.
- (17) Feld は「場」で「領域」や「圏」の語から一考されるが、この語がどうも物理学の方から入ってきたらしいと、『*World and I*』の Field 同士の關係が問題となつてくるのはなべて、この Field の内部の言葉の相互の關係を論ずる中で出てくる。『*World and I*』の Field の内部の言葉の相互の關係を論ずる中で出てくる。『*World and I*』の Field の内部の言葉の相互の關係を論ずる中で出てくる。『*World and I*』の Field の内部の言葉の相互の關係を論ずる中で出てくる。』
- (81) J. Trier: *Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes* 1931.
- (9) F. d. Saussure: *Cours de Linguistique Générale* Payot, Paris 1960, p. 160 等及び p. 126.
- (20) 上記 (8) の二二三頁。
- (11) これは K. Baldinger が “*Kollektivsuffixe und Kollektivbegriff*” (1950) の中で用いた semantische Nische の語による。cf. 上記 (8) の二二三頁。
- (22) 上記 (8) の二三四頁の『*Fächerung*』の語は、扇がある限度まで好きな角度にひろげられるというところから思いついた用語のようである。
- (23) Benecke-Müller-Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* III, Olms, Hildesheim 1963, 810.
- (24) Zugreifen は英語では “grasp” ノーマン語では “semparer de” という訳語がある。『*World and I*』の Weisgerber: *Grundformen sprachlicher Weltgestaltung* (Arbeitsgemeinschaft für Forschung des Landes Nordrhein-Westfalen, Heft 105), Westdeutscher Verlag, Köln 1963, 36~37.』
- (25) たとえば、内容的な次元であつかわれるのは、すべてスカラーであるのに対して、機能論的次元は方向が問題になるベクトルが重要になる。
- (26) Satzbauplan「文法設計図」による。E. Drach (*Grundgedanken der deutschen Satzlehre*, 1937) の『*Satzbauplan*』に於ける『*Satztyp*』と『*Satzmodell*』はそれぞれその動態的な概念で、あるいは母国語に於ける現実のさまざまな現象をどうにかの特定の状況 (Situation) に還元して解釈・処理してこそ可能になるであろう。
- (27) 内容決定の諸方式全部——機能論的に言えば捕捉のあらゆる方向全部を一括して含む概念として Weisgerber

は Sinbeirik「意味領域」という用語を提唱している。
したがって「色彩語の意味領域」といえば、その中にはそ
の意味内容をいろいろな方式で決定されるものが含まれる

わけである。

(一橋大学非常勤講師、立教大学講師)